

# 行政経済文書における preradical -n-の出現時期

峯 正 志

## When did the preradical -n- begin to be used in Sumerian economic tablets?

Abstract:

The aim of this short paper is to make clear when Sumerian preradical infix -n- began to be used in economic tablets. To achieve this, I collected some 3,000 instances of a verb šu~ti, and classified them in chronological criteria. This investigation may not be exhaustive in that it dealt with only a single verb, but may be sufficient to obtain an approximate picture of the actual use of -n-. The following two points are the main findings:

- 1) The preradical -n- began to be used during the reigns of Amarsuen and Šusuen.
- 2) This could be another instance of the linguistic "changes" that might have taken place in Amarsuen's reign.

## 1 はじめに

シュメール語の定動詞は、動詞語幹に接頭辞、接中辞、接尾辞が接辞されることにより形成される。これらの接辞の統語的機能については、かなり研究が進んできているとはいえ、今だに解明されていない要素が多い。動詞語幹の直前に現われる preradical -n-についても例外ではなく、その統語的機能については今だに定説が無い。<sup>1)</sup>

しかし、この小論の目的は、この要素の統語的機能を明らかにすることではない。統語的機能の解明が最終的な目標ではあるが、そのためにはまず基礎的なデータの収集・整理が必要であると考え。そこで本稿では、これまであまり注目されてこなかった観点から資料の整理を行なってみたい。すなわち、この要素が頻繁に用いられるようになるのは一体いつごろかという点である。本稿の目的は、その時期を明らかにすることである。

本来ならば、すべての動詞について調査を行なうのが理想的なのだが、ウル第三王朝期の資料をすべて調べ上げることは非常に困難である。そこで本稿では、この要素の比較的良好に現われる表現を取り上げて、時期による使用頻度を比較することによりその時期を特定したいと思う。

## 2 調査対象

この章では、本稿で何を調査対象にするのかを述べる。しかしその前に、これまでどのようなことがわかっているかについて述べた方がよいだろう。

まず明らかなことは、この要素は初期王朝期には全く現われないということである。後に触れるが、王碑文に何例か現われるのを除き<sup>2)</sup>、その他の文書には全く現われないことが判っている。

次に明らかなことは、時代がかなり下がってイシン・ラルサ期になると、出現率が非常に高くなるということである。もちろん、動詞によっては、この要素がまったく現われない場合もあるのだが、ほとんど100%に近い割合でこの要素を伴う動詞もある。<sup>3)</sup>

これらからはっきりすることは、ウル第三王朝期のある時期から、頻繁に使われ始めるようになるということである。

また、この要素の出現の条件にはレジスターも関係しているようである。というのは、例えば上で少し触れたように、王碑文には、初期王朝期にも現われる例があるのである。また、ウル第三王朝期の書簡や法律文書にはこの要素は頻出する。しかし、同じウル第三王朝期であっても、膨大な量が残されている行政経済文書の中では、書簡や法律文書ほど頻繁には現われない。<sup>4)</sup>

そこで、この要素の用いられ始める時期を明らかにするためには、各レジスターごとに、また各動詞ごとに調査を行なわなければならないことになる。しかし上述したように、そのような調査は現時点では非常に困難なので、本稿では次のように対象を絞ることにする。すなわち、レジスターとしては行政経済文書を取り上げる。また、取り上げる表現も -n- を比較的好く伴うという理由から、šū~ti (受け取る) に限定した。<sup>5)</sup>

## 3 調査方法

ニップール・ドレヘム・ウンマ・ラガシュの4都市から出土した行政経済文書を対象とする。用例をカードに取り、都市別<sup>6)</sup>・年代別に分類した。使用したテキストは、論文末にまとめて掲げている。<sup>7)</sup>

なお、次のような用例は本稿の分析からは除いている。すなわち、

- 1) -n-があるかどうか判読の不明なもの。
- 2) 出土地、年名の明らかでないもの。
- 3) 主語が複数で、動詞に複数語尾の -eš/ěš がついたもの。

1)・2)を除くのは当然であろう。3)については、現在のところ、-eš/ěšの存在が-n-の出現に影響を与えている可能性が皆無とは言えない<sup>8)</sup>ので、除いた方が適当であると考ええる。これについては、後述する。

## 4 調査結果

次に、ここで得られた結果を図示しよう。

	ニップール	ドレヘム	ウンマ	ラガシュ
シュルギ	2/74( 2.7%)	4/192( 2.1%)	5/282( 1.8%)	3/362( 0.8%)
アマルシン	4/108( 3.7%)	12/284( 4.2%)	16/117(13.7%)	0/124( 0.0%)
シュシン	9/245( 3.7%)	32/138(23.2%)	12/67(17.9%)	3/44( 6.8%)
イビシン	10/182( 5.5%)	13/46(28.3%)	0/16( 0.0%)	0/27( 0.0%)

表の見方であるが、縦軸が王の名称で、この順に王位を継承している。<sup>9)</sup>横軸は都市の名称で、左から右に行くに従って、北から南下していくことになる。

数値は、斜線の右側が šu~ti の現われる粘土板の個数、斜線の左側がそのうち -n- を伴った粘土板の個数である。括弧内の数字が、そこでの粘土板における -n- の出現率である<sup>10)</sup>。

## 5 考察

今回の調査で明らかになったことを挙げてみたい。

まず、preradical -n- の出現頻度であるが、全体の平均出現頻度は、

5.4% (2308例中125例)

である。治世別の出現頻度は次の通り。

シュルギ : 1.5% (910例中14例)

アマルシン : 5.1% (633例中32例)

シュシン : 11.3% (494例中56例)

イビシン : 8.5% (271例中23例)

これから明らかなことは、シュルギの治世にはまだあまり使われていないということである<sup>11)</sup>。アマルシンの時代に次第に使われ始め、シュシンの時代に急に増加することが分かる。

次に、地域別の出現頻度は次の通り。

ニップール : 4.1% (609例中25例)

ドレヘム : 9.2% (660例中61例)

ウンマ : 6.8% (482例中33例)

ラガシュ : 1.1% (557例中6例)

この数字をそのまま受け取れば、ドレヘム、ウンマで使われやすく、ニップール、ラガシュでは現われにくいということが言えるであろう。特にドレヘムでは非常によく現われる。また、それと対照的に、ラガシュではほとんど現われない。しかし、これが方言的差異によるものであるかどうかについては現段階では分からない。<sup>12)</sup>

全体的には上のようなことが言えると思うが、もっと詳しく見てみると次のような特徴が窺える。

まず、「アマルシンの時代に使われ始め、シュシンの時代に急に増加する」といってもどの地域でも一様に起きたわけではない。アマルシン時代には、まずウンマで使用頻度が高まるが、その他の地域ではそれほど顕著に高まるわけではない。ウンマでは1%台から急に10%台に上昇するが、その他の地域では1~2%台だったのが、4%前後になるだけだからである。その後も、ウンマ、ラガシュでは確実に使用頻度が上昇するが、ニップールでは、使用頻度は高くなるとはいえ、1~2%の上昇にすぎない。これでは用例数等の関係から、確実に上昇しているとは言えない。

また、ニップール、ラガシュでは-n-の使用頻度が低いことを上で述べた。ニップールではそれでも全体平均程度には使用されているが、ラガシュは異常に使用頻度が低いことがわかる。しかし、これも用例数等の関係で、シュシン、イビシンの時代に関しては確実なことは言いにくい。

さて、第3章の調査方法のところ少し触れたが、複数語尾-eš/éšがついた用例は、-n-が現われていても、上の表には加えていない。それは、上で述べたように、-eš/éšが原因で現われている可能性があるからである。しかし、今回得られた用例を見てみると、-eš/éšが現われている用例に必ず-n-が現われているわけではない。-eš/éšのついた用例全49例のうち、15例に現われるにすぎない(出現率30.6%)<sup>13)</sup>。特に重要なことは、時代の下がったイビシンの治世においても、かなりの数の用例に、-n-を伴わない-eš/éšの例(šū ba-ti-eš/éš)が見られるということである。このことは、-n-~-eš/éšをconfixとして捉える解釈を、再検討する必要があることを示唆しているように思われる。

## 6 アマルシン時代のシュメール語について

前章で見たように、行政経済文書における preradical -n-の使用は、アマルシンからシュシンの治世にかけて次第に頻繁になっていくということがあきらかになった。本章では、このことについて一つ気が付いたことを述べる。

Yoshikawa (1991) は、動詞接頭辞の mu-が、 preradical -n-と共起しないことを指摘している。ところが同じ論文で、この mu-がアマルシンの時代から突然-n-と共起し始めるということも指摘している<sup>14)</sup>。それまで-n-と共起することのなかった接頭辞 mu-が、共起した例を見せ始めるというのである。このことは、本稿で明らかになった現象と平行して

いるように思われる。すなわち、いずれも「アマルシン時代」に起きたある種の言語的な「変化」だからである。

これ以外にも、アマルシン時代において、シュメール語の変化を示唆するような現象を指摘した研究がいくつかある。Kang (1972) や五味 (1973) 等の指摘する書式の変化もそれに含めてよいだろう。彼らはドレヘム出土の行政経済文書について、「支出した」という表現 *zi-ga* が、アマルシンの治世から *ba-zi* へ変化したことを指摘した。また、峯 (1990) (1992) は、それぞれニップールとドレヘムにおいて、アマルシンの時代から、日付を表す表現が変化することを指摘した。この書式における変化も、このアマルシン時代に起こる「シュメール語の変化」の例として捉えてよいかと思われる<sup>19)</sup>。このようにアマルシンの治世にはかなり大きな言語的变化が起こった可能性がある。今回本稿で指摘した現象も、この大きな言語変化の中の一現象の一つに数えてよいと思われる。

## 7 結論

本稿で明らかになったことをまとめてみよう。

シュメール語の *preradical -n-* が用いられ始める時期は、行政経済文書における *šu~ti* を調査した結果、アマルシンからシュシンにかけての治世であることが明らかになった。この現象は、他の研究で言及されている、アマルシンの治世における一連の「言語変化」のうちの一つと捉えてよいように思われる。

## 註

- 1) 最近の研究としては、「焦点」を表す要素だとする Yoshikawa (1991) がある。
- 2) Yoshikawa (1991) p.389 および p.407, fn.3 を参照のこと。
- 3) 例えば Crawford (1954) に現われる *šu~ti* が用いられた全用例 103 例中、98 例に *-n-* が現われる。これは 95% 以上の高率である。
- 4) これらの点も、*-n-* の統語的機能の解明のための手がかりとなるであろう。
- 5) だいたいの傾向を調べるにはこれで十分であろう。
- 6) 都市別に分類したのは、単なる形式的なものだったが、用例を集めてみると、後述するように都市ごとに違った傾向が現われた。
- 7) 用例はカード型データベースにインプットし、処理した。
- 8) Yoshikawa (1991:p.392) には "...in this instance the infix *-n-* occurs with the suffix *-eš*, functioning as a kind of the confix." との記述がある。ただしこの論文では、"a kind of" と表現しているように、これを完全な *confix* と見做しているわけではない。*-n-* は *optional* な要素だとしている。(p.403)

9) 在世期間は次の通り：シュルギ治世48年 (B.C.2094～2047)；アマルシン治世9年 (B.C.2046～2038)；シュシン治世9年 (B.C.2037～2029)；イビシン治世25年 (B.C.2028～2004)。ただし、ここで用いた粘土板は、彼らの治世のそれぞれの年から均等に出土しているわけではない。たくさんの粘土板が出る年もあり、全く出ない年もある。特にシュルギの治世の前半および最初の数年を除くイビシンの治世は、出土する粘土板の数が少ない。王によって治世の年数が違うので、この表のように王の治世だけによる分類は本来ならば不適當で、一定の年数による表を作成すべきだという意見もあるかもしれない。しかし、シュルギの治世の初期はほとんど-n-は現われず、詳しい表を作成してもあまり意味がないと筆者は考えた。

10) -n-の出現率は次の式で出している。

$$\text{-n-の出現率} = (\text{-n-の現われる粘土板の個数} / \text{全体の粘土板の個数}) \times 100$$

11) 本稿では触れていないが、collective agentを示すといわれている preradical -b-の場合は、シュルギの治世にも現われる。

12) 今のところ筆者は、方言でなく、他の理由によってこのような分布の偏りが生じているものと考えている。これについては別稿で論じる予定である。

13) 因みに、地域別で述べると、

ウンマ : 0% (5例中 0例)

ラガシュ : 17% (6例中 1例)

ニップール : 28% (25例中 7例)

ドレヘム : 100% (6例中 6例)

となっている。ドレヘムにおいて異常な割合で現われているのが注目される。これだけの例でははっきりしないけれども、ニップールやドレヘムの用例を見てみると、-eš/éšの付く方が、付かない方より、-n-が現われやすい可能性はあるかもしれない。

14) Yoshikawa (1991:p.395) には”As is well known, in the texts later than Amarsuen, the -n- suddenly is used with the prefix mu-.”との記述がある。

15) これらの変化は、厳密に言うところ「文法」の変化ではなく、「書式」の変化である。しかし、書式の変化といえども、恣意的に替えたとは考えられない。言語的により適切な書き方に替えたのであろうから、以前の書式の持つニュアンスの変化がその引き金になったのではないだろうか。例えば、zi-ga→ba-ziの変化も、ニップールで起きた書式変化 (zal-la→ba-zal) も、ともに VERB-a 形でなく ba-VERB 形をとっているということも、この変化が単なる書式変化でなく、なんらかの文法変化と関わっている可能性を示唆しているように思われる。

## 引用文献

- Crawford, V.E. (1954) *Sumerian Economic Texts from the First Dynasty of Isin*.  
Babylonian Inscriptions in the Collection of James B. Nies,  
Yale University. Vol.IX. Yale University Press. New Haven.
- 五味 亨 (1973) 「ドゥレーヘムの家畜文書」『オリエント』 Vol.16. No.2. p.33～56
- Kang, S.T. (1972) *Sumerian Economic Texts from the Drehem Archive*. University of  
Illinois Press, Urbana, Chicago, London
- 峯 正志 (1990) 「URIII 期ニップール出土の行政経済文書における日付表現について」  
『ニダバ』 No.19 p.53～60
- \_\_\_\_\_ (1992) 「URIII 期ドレヘム出土の行政経済文書における日付表現について」  
『広島大学留学生センター紀要』第2号 p.35～41
- Yoshikawa, M. (1991) "Focalization in Sumerian Verbs"  
*Acta Sumerologica*. No.13 p.389～407

## 使用テキスト

- Archi, A. and Pomponio, F. (1990) *Testi Cuneiformi Neo-Sumerici da Drehem*.  
N. 0001-0412. Cisalpino-Instituto Editoriale Universitario. Milano.
- Çiğ, M. and Kızılyay, H. (1965) *Yeni Sumer Çağ na Ait Nippur Hukuki Ve Idari*  
*Belgeleri - I. (Neusumerische Rechts- und Verwaltungsurkunden aus Nippur -*  
*I.)* Ankara.
- Gomi, T. and Sato, S. (1990) *Selected Neo-Sumerian Administrative Texts from the*  
*British Museum*. The Research Institute, Chuo-Gakuin University. Abiko.  
(邦題: 『大英博物館所蔵の新シュメール時代行政文書』佐藤進・五味亨著)
- Kang, S. T. (1972) *Sumerian Economic Texts from the Drehem Archive*. University of  
Illinois Press, Urbana, Chicago, London
- Keiser, C. L. (1971) *Neo-Sumerian Account Texts from Drehem*. Yale University Press,  
New Haven and London
- Materiali per il vocabolario neosumerico* Vol I, III～X, XII～XIV
- Myhrman, D. W. (1910) *Sumerian Administrative Document Dated in the Reigns of the*  
*Kings of the Second Dynasty of Ur from the Temple Archives of Nippur*  
Department of Archaeology, University of Pennsylvania. Philadelphia.
- Owen, D. I. (1982) *Neo-Sumerian Archival Texts Primarily from Nippur in the*  
*University Museum, the Oriental Institute and the Iraq Museum*.

Winona Lake, Indiana

Pohl, A. (1937) *Rechts- und Verwaltungsurkunden der III. Dynastie von Ur.*

J. C. Hinrichs Verlag, Leipzig

Sauren, H. (1978) *Les tablettes cunéiformes de l'époque d'Ur des collections de la New York Public Library.* Université Catholique de Louvain.

Institut Orientaliste. Louvain-La-Neuve.

Sigrist, M. (1983) *Texts Économiques Néo-Sumériens de la l'Université de Syracuse.*

Paris.

\_\_\_\_\_ (1984) *Neo-Sumerian Account Texts in the Horn Archaeological Museum.*

Andrews University Cuneiform Texts, Vol.1. Berrien Springs, Michigan

\_\_\_\_\_ (1988) *Neo-Sumerian Account Texts in the Horn Archaeological Museum.*

Andrews University Cuneiform Texts, Vol.2. Berrien Springs, Michigan